

磐井川流域における大江堰取水口の 改修とその背景

稲 松 朋 子

論文要旨

岩手県一関市を流れる磐井川流域には、明応2年（1493）の開削伝承をもつ^{てる い ぜき}照井堰と^{おお え ぜき}大江堰が存在し、現在も一関市および平泉町の幹線灌漑用水として利用されている。両堰については、開削および改修に関する伝承はあるものの、史料に乏しいことから、伝承の真偽については明らかでない。そこで本稿では、両堰に関する数少ない史料のうち、^{おおしめきり}大メ切を描いた3点の^{え ず}絵図を取り上げ、絵図の位置付けと、大江堰取水口の改修とその背景について検討し、次の結論を得た。

- 1、絵図の位置付けについて、「^{いのおかようすいっけん}猪岡用水一件」争論の後、定盤の移動距離や位置について示した図が「定盤絵図」、定盤移動にともなう普請の詳細について示した図を「絵図 A」とした。「絵図 B」は大江堰側によって作成されたものとした。
- 2、「猪岡用水一件」争論の結果、定盤石によって大江堰の水路幅が2間となり、あわせて同堰の取水口が堅牢な構造となった様子が窺える。
- 3、取水口をめぐる争論の背景に、伝承では寛永20年（1643）とされる、大メ切化の問題が指摘できる。

キーワード：^{てる い ぜき}照井堰 ^{おお え ぜき}大江堰 ^{おおしめきり}大メ切 ^{え ず}絵図 ^{いのおかようすいっけん}猪岡用水一件

はじめに

岩手県一関市を流れる磐井川流域には、左岸を灌漑する照井堰と、右岸を灌漑する大江堰が存在し、一関市および平泉町の幹線灌漑用水として利用されている。照井堰は、明応2年（1493）に照井太郎が、磐井川兩岸に隧道水路を掘削して開削したとの伝承を持つ¹。前近代における両堰の開削や改修についてはいくつかの伝承が残されているものの、史料に乏しいことから、伝承の真偽については明らかでない²。筆者は両用水路の開削経緯や変遷、耕地開発等を明らかにするため、灌漑地域の検地帳の分析³や、類例の一つとして両堰北東部に位置する真打堰開削の背景について検討を行ってきた⁴。また、大江堰の開

削について、地籍図段階の用水路の復原や、検地帳の分析等を通じて、近世初期に当地方を治めていた伊達宗勝によるものではないかとの可能性を示唆した⁵。しかし、未だ両堰の実態について論証するには至っていない。そこで本稿では、両堰に関する数少ない史料の一つとして、大メ切を描いた「磐井川揚堰定盤据付絵図面（写）」と、「猪岡用水一件」絵図2点の計3点の絵図を取り上げる。前者は、市史等で取り上げられている周知の史料であるが、これまで絵図の描写内容について詳細な分析はなされていない。後者は、史料の翻刻が市史に掲載されているが、付属する絵図については管見の限り取り上げられていない。これら3点の絵図の位置付けと、大江堰取水口の改修とその背景について論じ、照井堰・大江堰に関する実態解明の一助としたい。

1、照井堰、大江堰の概要

北上川の支流である磐井川は、秋田、宮城、岩手の3県に跨がる栗駒山を水源とし、一関市内を東流し、北上川に合流する⁶。照井堰、大江堰は現在、磐井川を堰き止める形で設置された大メ切頭首工で取水され、同川兩岸の河岸段丘上を灌漑する。灌漑域と幹線水路を示したものが図1である。水利施設としてのメ切は、「河流の変更、又は、灌漑用水の上水等の場合に於いて施工された」⁷と説明される。

磐井川の右岸を灌漑する照井堰は、大きく分けると、五串、赤荻を通過して山目に至るものと、五串村で北側に分水されて太田川に合流するものとにわかれる⁸。山目地内ではさらに3方向に分水され、山目以北および以東の地域を灌漑するが、この内の一部は北上して平泉地内に到達する。一方、太田川流域では、左岸は日向堰、右岸は西風堰によって灌漑される。大江堰は磐井川右岸を灌漑する。

灌漑域の村々は、天正18年（1590）の葛西大崎一揆の後、天正19年（1591）から仙台藩領となる⁹。慶長9～元和2年（1604～1616）には伊達氏家臣の留守氏が一関城に在城する¹⁰。その後、万治3年（1660）には、伊達宗勝による一関藩が成立し、磐井川流域一帯は全て同藩領となった¹¹。宗勝は、寛文11年（1671）に寛文事件の首謀者として配流の処罰を受け、一関藩は仙台藩に没収されたといわれる¹²。天和2年（1682）には、田村氏による一関藩が成立し、大江堰灌漑域は猪岡村を除き全て同藩領に¹³、照井堰灌漑域および猪岡村は仙台藩領となり、以後幕末まで続くこととなった¹⁴。なお、宗勝一関藩も、田村一関藩も、いずれも仙台藩62万石から3万石を分知される形で成立している¹⁵。

照井堰にはいくつかの伝承が残されているが、このうち近世については次のような伝承がある¹⁶。寛永20年（1643）に、北照井堰¹⁷の穴堰が破損し、河川の変化のため、仙台藩

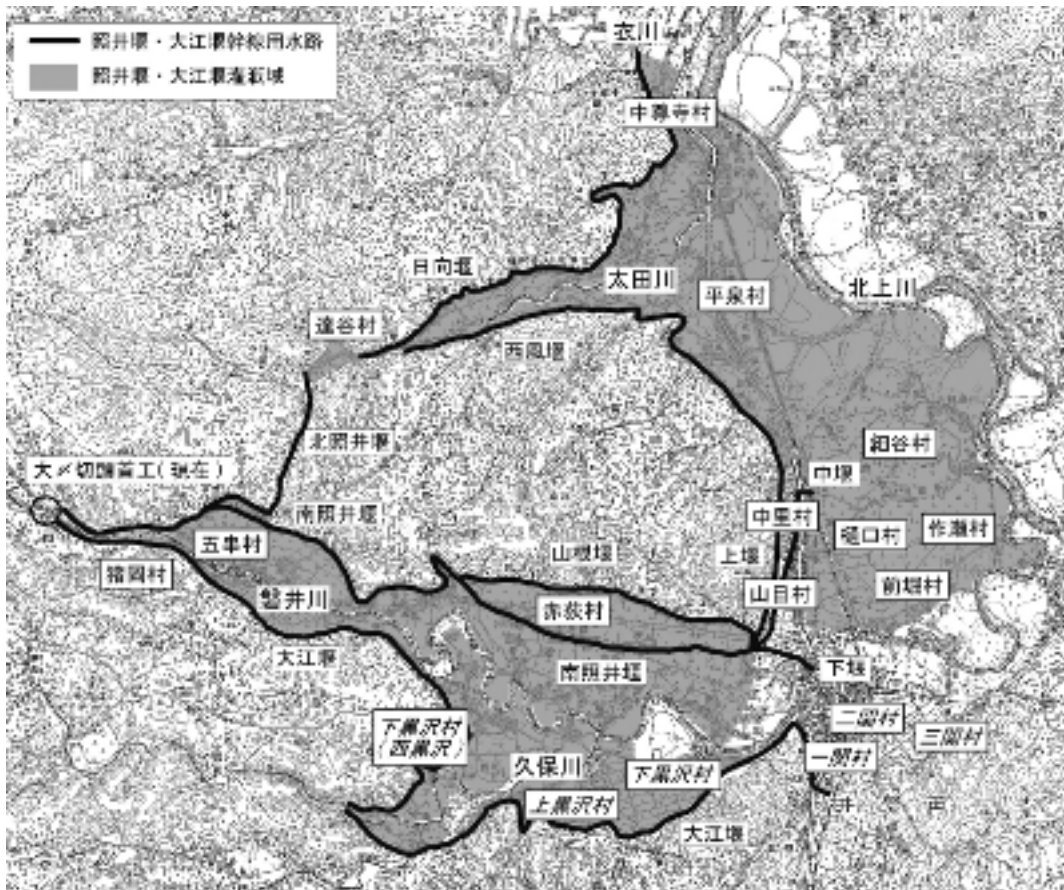


図1 照井堰・大江堰灌漑地域

ベースマップは5万分1地形図「一関」水沢（大正2年測図）を使用。照井堰・大江堰の灌漑域および幹線水路は、「照井土地改良区概要図」（『照井土地改良区小誌 鐵心郷潤』照井土地改良区、2006年）、「照井堰・大江堰概要図」（高倉淳『仙台領の潜り穴』今野印刷、2002年）をもとに作成。村名は近世村で、伊藤玄三監修『絵で見る古里 一関郷村絵図』（岩手日日新聞社、2003年）を参照。

※）幹線水路には隧道水路も含まれるが、同図では区別せずに全て実線とした。現在は北上川左岸にも灌漑域があるが、これは省略した。「安永風土記」によれば、近世には一関村、二関村、三関村も大江堰の灌漑域となっている。

により河川を斜めに堰き止め、穴堰の代わりに新たな堰を設けたという。その後、水路が延長し、杭丁沢に笕をかけて赤荻地内へ通水した。承応元年（1652）に大肝入の大崎掃部左衛門が照井堰の改修を行い、その後、寛文元年（1661）には平泉村の柏原清左衛門が猿鼻隧道を開削し、平泉方面への通水が可能になったという。大江堰については、元禄16年（1703）と、安政元年（1854）に改修したとの記述があり¹⁸、後者は本稿で述べる定盤の移動を指していると思われるが、元禄については詳細不明である。

近世における照井堰、大江堰の灌漑の実態については、「安永風土記」に記載された溜高¹⁹が参考になる。溜高は「その水利施設が灌漑する耕地の生産高」²⁰と説明され、照井堰、

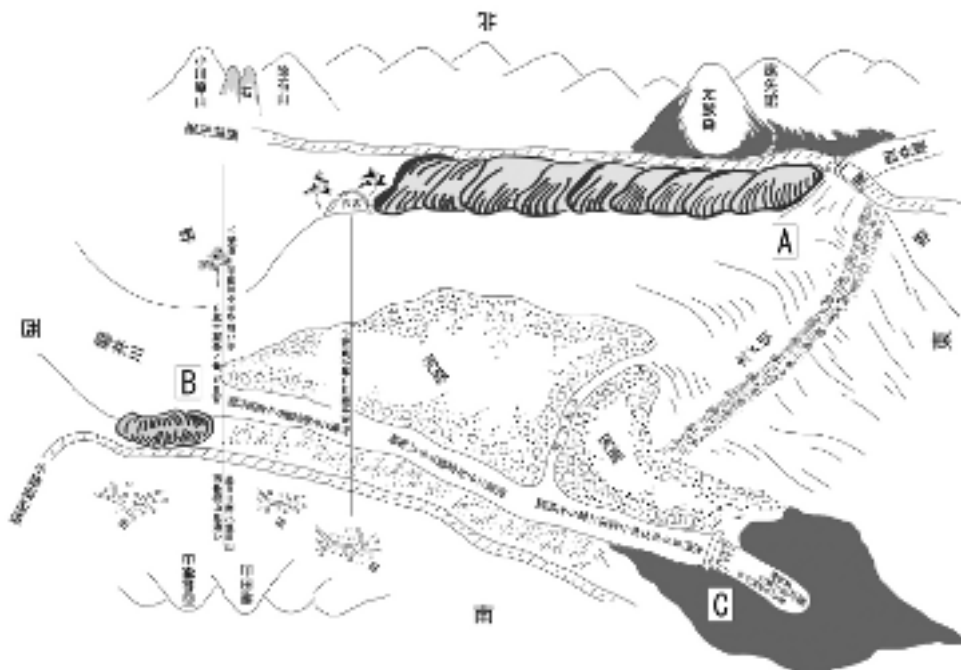


図2 「碁井川揚堰定盤据付絵図面 (写)」トレース図 (個人蔵) (47cm × 64cm)

注) 図中の A～C は図5 に対応。

大江堰の灌漑の割合や、各村での灌漑の規模について参考となる。なお、「封内風土記」²¹や「宝暦風土記」²²、「安永風土記」では、「照井堰」の名称はみえるが²³、大江堰については、「猪岡堰」、「黒沢堰」等とよばれており、大江堰の名称はみえない。近世に大江堰の名称が存在したか否かは疑問の残るところであるが、本稿では大江堰の名称で統一する。

2. 史料の概要

(1) 「碁井川揚堰定盤据付絵図面 (写)」

「碁井川揚堰定盤据付絵図面 (写)」(以下、「定盤絵図」)(図2)は、絵図の他に安政元年10月の史料(史料1)と、明治40年(1907)9月の史料の計3点が一続きの折本形式に装丁された史料である。明治40年に八巻一覧氏によって写されたとされ²⁴、明治40年の史料には「明治四十年九月 西碁井郡一関 筆耕者 八巻一覧」の署名とともに、「定盤絵図」の間数に関する私見が記されている。同絵図と付属する史料については、これまで市史や改良区誌等で紹介されており²⁵、高倉淳氏は絵図の現地比定もされているが²⁶、いずれも絵図の描写内容について十分な分析がなされているとはいえない。

史料1 「磬井川揚堰定盤据付絵図面（写）」史料（個人蔵）

田村右京太夫様御知行所西磬井 下黒沢村之内、西方始上黒沢村、下黒沢村、 一関村、二関村、右五ヶ村并御蔵入同郡 猪岡村宮田下通り之溜高用水同村之内、 磬井川より揚堰引入場所、連々川容 転変、入口江砂石居揚り、湯水之節割合 之通り用水不引入候二付、品々御吟味罷成、 御下知之上、元定規より式拾六間為相登、 定盤石御据方罷成候境見通し 御絵図	同年同月 西磬井中里町絵図師 誰	右之通、拙者儀御引添御吟味御首尾 罷成、相違無御座候以上 西磬井一関大肝入 安政元年十月 誰	西磬井水下肝入其外 一関御知行所大メ切用水 揚場立会人数 （※）
---	------------------------	--	---

注）同史料に続き、明治40年9月の年記とともに筆耕者八巻一覽氏による間数に関する記載があるが、この部分は省略した。

（※）猪岡村肝入宮田三五郎、五串村肝入松吉、赤荻村肝入佐一郎、山目村肝入代五郎、前堀村肝入、作瀬村肝入、細谷三ヶ村肝入、達谷村肝入、平泉村肝入、中尊寺村肝入、大肝入大槻専左衛門、普請方小林源五郎、御代官、御横目

史料1は同図に付属する安政元年の史料である。同史料の差出は「西磬井中里町絵図師」と、「西磬井一関大肝入」となっている。一関藩では西岩井郡に大肝入が置かれていることから²⁷、この「大肝入」は一関藩の大肝入であろう。署名は「誰」と記載されており、同史料は実際に提出された原本でなはないうである。差出の次に立会人の連署が続くが、立会人となっている村は全て仙台藩領で、猪岡村を除き照井堰灌漑域である。立会人の「大肝入大槻専左衛門」は仙台藩領の大肝入で、「専左衛門」を名乗る人物には、宝暦期の大槻清雄と、在職年不明ながら幕末に役を勤めた大槻清裕の2名が確認できる²⁸。同史料が安政元年であるならば、ここに署名しているのは后者の「専左衛門」であろう。また、「一関御知行所」という表現は、一関藩の領地をあらわす際に使われる文言との指摘があり²⁹、「一関御知行所大メ切用水」は、主として一関藩領の村々を灌漑する大江堰を指すものであろう。宛所の記載は見当たらない。

同史料では絵図作成の背景について、一関藩領の下黒沢村西方³⁰、上黒沢村、下黒沢村、一関村、二関村と、仙台藩領の猪岡村³¹が、取水場所に砂石が溜まる等して湯水時に割合通りに取水できなくなっており、取り調べの結果、「御下知」により、元の位置より26間上流に定盤石を移動させることになり、その境を見通す絵図と記述されている。この村々は全て大江堰の灌漑域に含まれる村であり、大江堰側で取水できなくなっている状況と読める。この中には、本来灌漑域に含まれるはずの三関村の記載がみえないが、「安永風土記」では、ある時期から三関村まで通水できなくなった旨の記述があり³²、この状況が改善さ

れずに続いているとみえる。猪岡村は、立会側にも名を連ねているが、これは同村が大メ切に隣接する仙台藩領の村であるためであろう。また、大江堰が猪岡村よりも下流の村の灌漑を目的としており、猪岡村がもつ大江堰の水利権は、大江堰のために村内の土地を供出している徳水の権利であるためと推察できる。定盤石の移動や絵図の作成について、「御下知」や「御据方」「御絵図」と記載されていることから、藩が関与していた様子が窺える。史料1が「定盤絵図」の説明として付属されているようにみえることから、絵図の年代についても、ひとまず史料と同時期の安政元年10月のものと理解したい。史料1を読む限り、「定盤絵図」は定盤の移動と設置に際してその境を示したものと読めるが、この点については絵図の描写内容から検討したい。

(2)「猪岡用水一件」

次に「猪岡用水一件」史料は、田村家文書におさめられており³³、市史でも紹介されている史料である³⁴。市史には書き下し文で掲載されているため、原本確認を要するが、原本は所在不明となっており、市史に依拠せざるを得ない³⁵。現在、「猪岡用水一件」と表書きされた史料整理封筒には、2点の絵図（図3、図4）と、「一関市立図書館」と印字された封筒がおさめられている。田村家文書は一関市立図書館から一関市博物館に移管された経緯があり³⁶、市立図書館の封筒が同封されているのはこのような理由によるものであろう。市立図書館の封筒の表には、「猪岡用水一件 四通」「扣書一通…筆写済（三七、九、六）、見取図三通」「野村八郎右エ門か 忠兵衛宛」の他、史料整理番号に関わるものとして、赤鉛筆で「政308」と書かれ、「138」と書かれたシールが貼られている³⁷。確認できた絵図は2点のみであるが、「見取図三通」の記載から、実際には絵図がもう1点存在していたようである。「筆写済（三七、九、六）」の記載は、「猪岡用水一件」史料を筆写した年月日であろう。現在使用されている史料整理封筒表の備考欄には「文書なし 58、9、27」の記載がある。「58、9、27」の数字は、先ほどと同様に年月日をあらわし、この時点で「猪岡用水一件」史料が存在していなかったということであろう。

「猪岡用水一件」に関する史料は、市史の掲載から、文書のみと思われたが、実際には付属する3点の絵図（現存は2点）が存在していることになる。管見の限りこの2点の絵図について紹介されたものはなく、これまで取り上げられていない可能性が高い。以下本稿では、市史に掲載され、原本が所在不明となっている文書史料を「猪岡用水一件」史料、付属する2点の絵図を総称して「猪岡用水一件」絵図とし、個別には図3を「絵図A」、図4を「絵図B」とする。また、「猪岡用水一件」史料に記された争論をさす場合は、「猪岡用水一件」争論とする。

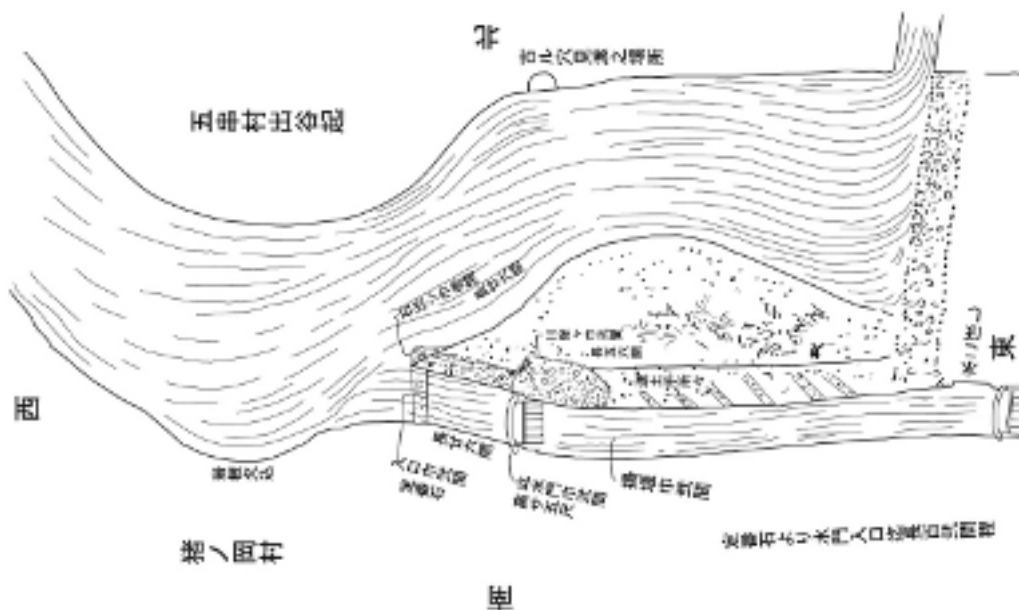


図3 「絵図A」トレース図（一関市博物館蔵）(31cm × 54cm)
田村家文書 No.871「猪岡用水一件」

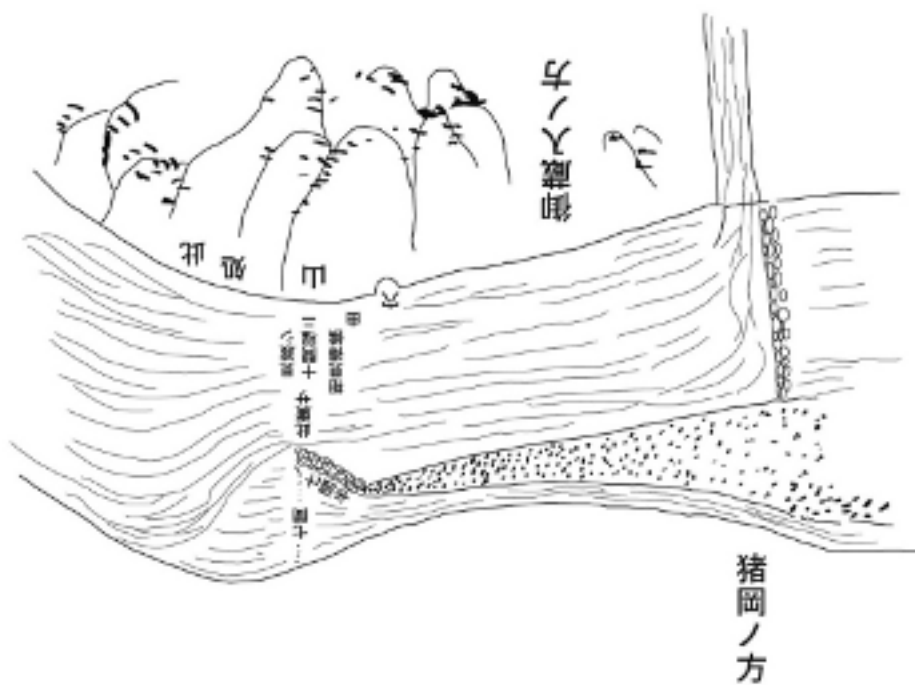


図4 「絵図B」トレース図（一関市博物館蔵）(20cm × 25cm)
田村家文書 No.871「猪岡用水一件」

次に「猪岡用水一件」史料に記された争論の内容についてみていく。先述の通り、市史の引用は書き下し文となっている上、通常とは異なる表現もみられるが、全てそのまま引用した。また、句読点の他、() や、……の記載、ルビが振られている箇所等もあるが、これらもそのまま引用した。

猪岡揚堰改修意見書（水引方一件）³⁸

田村家所蔵文書「政治（138）308」

猪岡揚堰水御知行所へ引方一件に付あなた御代官へ対談仕り候へ共、治定相成らず候に付、御取極罷り成り度く、大意の扣

御知行所西岩井御郡之内上下西黒沢三ヵ村并に一二閼両村共五ヵ村（但し三黒沢はあなたへ対しては上下黒沢両村にて下黒沢西方東方と御家一統には相分れ、両村に相成り候へ共、やはり三ヵ村と申し唱へ候而も苦しからず候事に承り居り申し候）、猪岡揚堰水 downstream 村々にては先年より右引水を以て用水引き足し来り候由の所、近年に至り追年水口紛られ流れ込み不足故、水元三ヵ村へも十分の引水行き渡り兼ね、就中、^{なかんずく}当春より別して水不足、作立て品々より用水引き足らず、末水の一二閼両村は勿論水元三ヵ村共々多分堤水を以て植仕付相成り候処、其後も引続き降雨之れ無く無類の大旱魃に相至り候。弥増来水これ無く田丁一体に干上り白割れに相成り日増枯れ立ち候に付、種々雨乞の御祈禱、水賦りの御手段も御尽し相成り^{ひろ}浩く惣御家中、御百姓へ力を合わせ、揚堰へ岩井川水汲み込み候へ共、数拾日通水これ無く、元堀干割れ居り、元穴は深水にのみ相成り……人力の御費相立ち候迄の事にて、平道堰堀の通水絶え果て居り候は、別して此の節の御心痛増に罷り成り候御儀と恐れ入る至極に存じ奉り候。

一右に付、過ぐる五日下伊沢御代官廻村を以て罷り越され対談仕り候次第は、是迄御知行所へ入り水不足故品々前件の通りにこれ在り候へば、右等の間柄篤と勘弁致し呉れ、此処にて末水の村々迄も惣体の田丁へ残り無く水一と渡り行き届き候様、堰口の手配相い請け度く、且つ又水入口御蔵入の七分、御知行所などへ三分の分流に相成り居り候へ共、かねて三分の入口名のみにて、細流に相成居り候方より、此節干水と相成り候へば御知行所へは一円流水これ無く難渋迷惑に相成り候間、全体の川水多少に寄らず平道ともに割合の分水三分だけは流れ込み相成り居り候様、吟味相請け置き度く、然^さ無く候ては不相当の次第を程好く申し談じ頼み込み申し候処、昨七日御普請方御役人小林源五郎あなた水下拾五ヵ村肝入共召し連れ右揚場へ出役、吟味の上御知行所入口式分の割合に異議無く水入れ相成り候様瀬下掘り方仕るべく候旨申し渡し候へ共、あなた水下の者不服の品々種々申し立て、瀬形掘り下げは相扣え、土俵を以て突き堅め流し込むの手、段々相数組み候由、御代官中村八郎兵衛へ御役人より挨拶の通りは、先ず以て三分の処壺分の減に相立て候上、土俵堅めは一水毎に押し流れ跡々の証拠にも相立たず、かの五ヵ村へ釜に一鉢の水渡しも覚束無く、万端折角御頼み込みの詮も相立たず候間、尚又御代官遠藤小三郎へ左の通り御頼

み込み罷り成り候様仕り度く存じ奉り候。

一御知行所通りへ式分の水入れ相成り候様、当座の手入のみにては、此の急場にあまり、早速五ヵ村へ水渡り（にも）相成らず候間、是迄あなた水元の村々、大街道上の村並に引水行き渡り候様、御知行所三ヵ村へも水賦り相成らず候ては御分領一駄の訳にはこれ無く、御蔵入村々斗りの……御知行所通り干損に相至り、不相当の間柄、御理解成し下され候て何様か押しても手配御世話申し上げべき哉に存じ奉り候。

一引水の割合七分三分の処、此度八分式分に相直し候は何か^{しか}駈と仕り候御定もこれ在るべき哉。此方様に於て七分三分と申す儀も御郡方にて忿に穿鑿仕り候へ共、何も御旧記に是と申す治定もこれ無き由に相聞こえ、然候へば古来より段々申し伝へ迄の事にも御座在る可く候哉、水下村々の者共始め一統右様相心得居り候斗りにも御座無く、右引水三分之内にあなた水下猪岡村にても同様の割合に相心得居り候事に相聞こえ、依つては八分式分は全くあなた水下の村々にて勝手次第に申し唱えにもこれ在るべく、双方跡方もこれ無き、誠に水掛論にも御座有るべく候へ共、古来は^{ひろ}訖度割合これ無くては叶はざる訳に御座候間、^{ひろ}浩く御蔵入御知行所共に堰掛水溜貫高を以て御割合相成り候はば、当不当明白に相立つ可く候。（但水溜メ高と申すは村々田代高には御座無く、其村々に寄り入江、端沢又は高地山田等にて天水堤水を以て用水事足り堰水相掛けざる場所之田代貫高引除き、全く堰水相掛け候田代貫高斗り取り調べ候代高に御座有るべく候）

右の通にて式分三分の治定相成候はば、それだけの分流はたとへ何程干水の折にても、川水の流勢に随ひ双方へ甲乙無く、水の高下に寄らず何時も流れ込み相成らず候ては相い当り仕るまじく、早速土俵堅めは相扣え相当の瀬下掘方相成らず候へば、何時も御蔵入にて自由勝手に引水仕り、御知行所水入れには彼れ是れと指し討ち斗りにて相請け、何となく入口細め狹め、当年の如き無類の大旱魃の年柄には水下村々干損に相成り候間、此度は訖度相改め候様御頼み込み成し下され候方と存じ奉り候。今度土俵堅めにいたし瀬下差し支へ候は、全く御蔵入の者共、跡々の証拠相立て候を恐れ、勝手を構へ候訳に御座在るべく候。

右の通り拙者対談仕り候手続に付、押し立てず大意取調べ申し上げ候間、御内々御含み御吟味成し下され候方と御承知の為め迄に、此段申し上げ候。已上

七月八日

野村 八郎右衛門

忠 兵 衛 様

同史料が「扣」であることや、差出と宛所は、先述の市立図書館の封筒の表書きに一致し、同史料の原本が同封されていた可能性が高い。なお、野村八郎右衛門と忠兵衛様については明らかにし得なかったが、前者は大江堰側の人物であろう。この争論で、照井堰と大江堰で問題となっているのは、取水割合が7：3であるのか8：2であるのかと、あわ

せて水口の普請を「土俵堅め」とするか「瀬下掘方」とするかである。

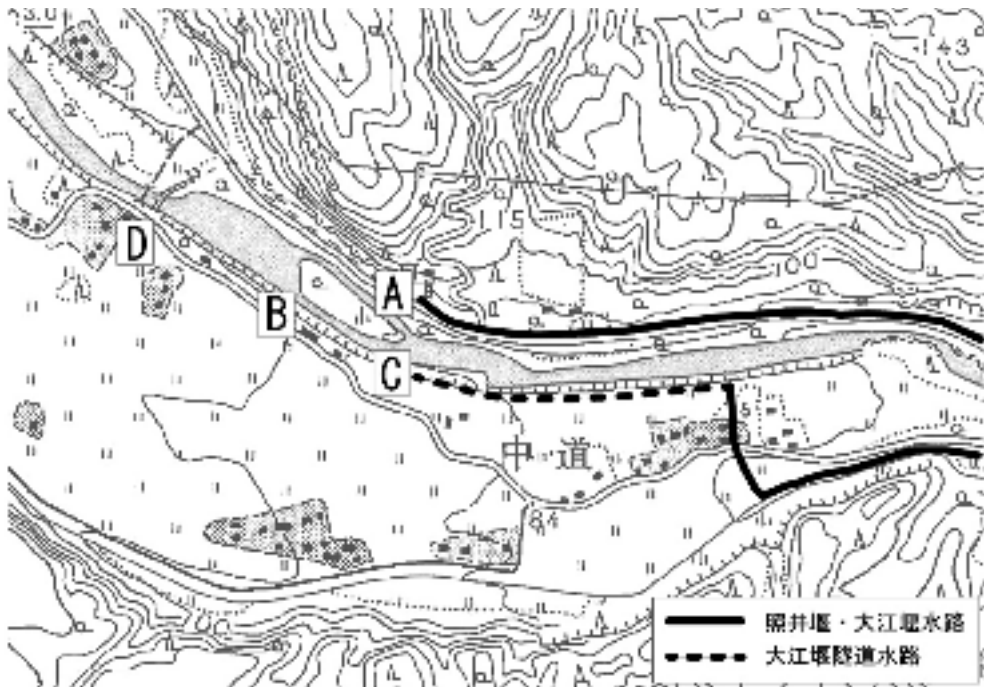
この争論の時期について、市史では「猪岡用水一件」史料中の「御普請方御役人小林源五郎」と、「定盤絵図」付属の安政元年史料（史料1）の「普請方小林源九郎」が、五と九の違いはあるが、同時期のものと推定している³⁹。高倉淳氏も、「定盤絵図」は「猪岡用水一件」の際に作成されたものと述べている⁴⁰。「猪岡用水一件」史料と絵図には年代記載がなく、史料に「七月八日」と書かれているのみである。年代を特定する手がかりとして、一つには、「猪岡用水一件」史料に記された早魃がある。「定盤絵図」に近い時期のものと仮定した上で早魃の記録をみると、一関藩領では、嘉永6年（1853）の大早魃の記録が残されている⁴¹。また、「猪岡用水一件」史料に登場する人物について、「御普請方御役人小林源五郎」については詳細不明であるが、「御代官中村八郎兵衛」、「御代官遠藤小三郎」については、中村八郎兵衛が嘉永6年の「大旱雑録」に西岩井の代官として、遠藤小三郎が同年7月改めの仙台藩領の「御分領中御代官」史料に「西磐井・下伊沢」の代官として、それぞれ名前がみえる⁴²。したがって、人物については、史料にみえる人物と同一人物か否か確証は得られないものの、早魃の年代と合わせて考えると、ひとまず「猪岡用水一件」史料中の「当春より別して水不足」は、嘉永6年のことと解釈したい。

「定盤絵図」と「猪岡用水一件」史料との先後関係について、市史では、土俵のかわりに定盤を設置したらしい、との見解や、「定盤絵図」からは照井堰と大江堰の取水割合が7:3であるのか、8:2であるのか分からないとの記述から、「猪岡用水一件」争論の後に「定盤絵図」が作成されたと推定していると思われる⁴³。しかし、この中では「猪岡用水一件」絵図について言及されていないため、絵図を踏まえてあらためて考察する必要がある。本章では「定盤絵図」と「猪岡用水一件」絵図の内容について検討を行っていく。

3. 絵図の検討

（1）「磐井川揚堰定盤据付絵図面（写）」

「定盤絵図」は、彩色が施された図で、磐井川に「大メ切」が、同川左岸に「照井堰」が、同川右岸に「潜穴」へと続く大江堰がそれぞれ描かれ⁴⁴、照井堰、大江堰の磐井川の取水口付近を描いた図である。西側では磐井川が南に湾曲しており、攻撃斜面とおぼしき場所には岩の図像が描かれている。照井堰側には「野」が、大江堰側には「田」の文字とともに水田図像が描かれ、河岸の景観が異なる様子が示されている。西側の平行線の延長線付近の山と、照井堰の西側の山には名称が付されている。「古穴」の両脇や、西側の平行線の延長線にある樹木の図像は、それぞれ象徴的に描かれているようにみえる。河原の中央



A 大メ切・照井堰取水口、B 大江堰取水口、C 大江堰「潜穴」、D 現在の大メ切頭首工（図2に対応）

図5 「定盤絵図」現地比定図

ベースマップは、2万5千分1地形図「平泉」（昭和43年測量）を使用。復原には高倉淳「磐井川水系 照井堰・大江堰」『仙台郷土研究』復刊第26巻第1号、2001年を参照した。水路は明治期の水路を復原し、「大江堰水路図」（『伝え流る、清流 幾星霜』照井土地改良区、2012年）および、「岩手県陸中国西磐井郡猪岡村字夏梨絵図」（一関市役所蔵）、「岩手県陸中国西磐井郡猪岡村字宮田絵図」（同蔵）を参照した。

には、大江堰から磐井川への余水吐と思われる「水ゴボシ」がある。「河原」は北側に張り出した形状で描かれるが、これは「大メ切」で河川を堰き止めたために生じた堆積の状況を表現しているとみえる。「大メ切」も、細かな描写がされており、堰の材質や構造をよく示しているものと思われる。図の南東の「潜穴」の入口にある「水門」については、高倉氏が「ゴミ除けの堰」としている⁴⁵。同図の現地比定を行うと図5となる。

絵図の下方、大江堰の水路にあたる部分には、東西方向の距離と方位が示され、南東に描かれた「潜穴」の「水門」から「元定盤」、「新定盤」それぞれへの間数が書かれている。この間数と方位の表示は、一番東側には「水門ヨリ水ゴボシ迄戌ニ當リ七拾間」とあり、「水門」から「水ゴボシ」までは戌、つまり西北西の方角に70間であるとわかる。次の記載は「同度ニテ元定盤マテ八拾間」とあり、「水門」からの距離であるのか、「水ゴボシ」からの距離であるのか明らかでないが、「同度」とあり、これも起点から「元定盤」までが西北西にあたること示されている。次の「同度ニテ新定盤マテ式拾六間」も、起点が記されていない。しかし、「水門」から「水ゴボシ」までが70間であるため、「水門」から「新

定盤」までの距離が26間ということはあり得ず、これは「元定盤」からの距離であろう。したがって「新定盤」は、「元定盤」から「同度」、つまり西北西に26間上流に位置していることが読み取れる。東西の距離が70間と26間では倍以上の差があるものの、「河原」の東西の長さは見た目の印象ではそれほどの差は感じられず、同図はこのプロポーションを正確には描いていないようにみえる。そのため、先ほど保留とした中央の「同度ニテ元定盤マテ」の起点を、絵図のプロポーションから判断することは難しい。この点については後述する。

同図で最も目につくのは、南北方向にひかれた2本の平行線であり、これが同図の主題をあらわしていると思われる。東側の線には「元定盤ヨリ古穴見通シ」の文字があり、「元定盤」が「古穴」の延長線上に設置されていたことが示されている。西側の線には南向きに「是ヨリ南ハ堰田山 西長根山見通シ」、北向きに「是ヨリ丑ノ壹度ニ當リ 北ハ除石山 小川原山見通シ」の文字がそれぞれ書かれている。東側の線は「元定盤」を示すが、平行線の間の「同度ニテ新定盤マテ二十六間」の記載から、西側が「新定盤」を示す線で、平行線間が26間とわかる。西側の線に書かれた「是ヨリ丑ノ壹度ニ當リ」は、ある1点から丑、つまり北北東を見通しており、「是」は「新定盤」を指すのであろう。つまり「元定盤」の線が基準となり、この線と平行距離に26間上流に移動させたものが「新定盤」の位置となる。したがって、平行線と、河原の接点が定盤設置位置となる。西側の線に「丑ノ壹度ニ當リ」とあるのは、「元定盤」から「古穴」を見通す方角が「丑ノ壹度」にあたるということであろう。「新定盤」の線では、「新定盤」から「丑ノ壹度」を見通した先に「除石山」と「小川原山」があり、この線を南側に延長した先に見通す山が、「堰田山」と「西長根山」という意味であろう。「元定盤」の線には、南側を見通す事物が書かれていないが、この線は「古穴」と「元定盤」とを結ぶ線によって角度が決まるので、あえて書く必要はないといえる。したがって、「定盤絵図」の主題は、「元定盤」から「新定盤」への移動距離や位置を正確に表現することに主題があったといえ、史料1にみえる絵図の内容に合致するとみてよいであろう。

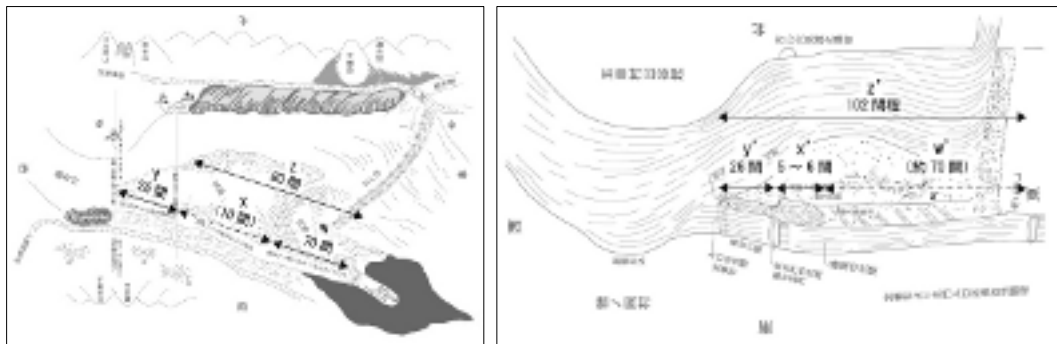
(2)「猪岡用水一件」絵図（絵図A、絵図B）

「絵図A」は墨一色で描かれており、紙背には「猪岡用水一件」と書かれ、この文字のすぐ横に、鉛筆で「4通」と書かれている⁴⁶。同図は、大メ切とその西側に照井堰の取水口が描かれ、北岸に「古ル穴」が、西側には磐井川の南への湾曲部が描かれる等、「定盤絵図」と同様に照井堰と大江堰の磐井川の取り入れ口付近を描いた図である。「古ル穴」の対岸には「水門」が描かれ、「水門」から26間上流に「入口巾式間 定番石」と書かれて

いる。この位置関係と距離は、「定盤絵図」で、「古穴」の対岸に「元定盤」があり、「元定盤」から26間上流に「新定盤」があることと対応する。つまり、「絵図 A」の「水門」と「入口」は、「定盤絵図」の「元定盤」と「新定盤」に、それぞれ合致する。「入口」は大江堰の取水口であるが、「入口」と「水門」、「揚堰」の幅がそれぞれ2間となっており、水路幅が2間に決められていたことがわかる。「水門」は2ヶ所に描かれるが、東端の「水門」は、「定盤絵図」で「潜穴」の入口に描かれた「水門」と同一のものであろう。河原には「石出シ」⁴⁷、「川除ヶ」、「土手」が描かれている。「石出シ」と「川除ヶ」は幅と長さが記載されており、「川除ヶ」が「石出シ」の2倍の幅となっている。「石出シ」と「川除ヶ」は「石出シ」が四角形のように描かれているのに対し、「川除ヶ」は丸みを帯びた形で描かれている。「石出シ」は河原の先端に合うように描かれており、磐井川を照井堰と大江堰に分水している場所となる。「定盤絵図」に描かれた2本の平行線について、定盤は、平行線と河原の接点に位置すると述べたが、この「石出シ」の先端が定盤石設置場所と理解できる。「古穴」の対岸にある水門が「元定盤」であることを述べたが、「川除ヶ」はこの水門の先端に合うように描かれていることから、「元定盤」の段階は、この「川除ヶ」の先端に定盤石があったことになる。これは先端に「川除ヶ」が設置されたことで、役目を終えたといえる。つまり、「石出シ」は、「新定盤」設置にともない造成されたものであり、「元定盤」の段階では「川除ヶ」が、河原の先端部、つまり「石出シ」であった。しかし、新たに「石出シ」が作られたことで、「川除ヶ」の役割へと変化したと理解できるのではないか。

西側の磐井川の湾曲部には「岩根欠込」の文字がみえる。「欠込」は堤防の決壊を意味するとされるが⁴⁸、絵図ではこの場所が攻撃斜面にあたるように描かれており、このために決壊したとよむことも可能であろう。「定盤絵図」で岩の図像が描かれていたのはこの場所であろう。この場所が決壊した場合、大江堰の取水に影響がでることから、両図ではこの場所に注記しているのではないだろうか。北岸には「五串村出谷起」とあり、「谷起」は「冠水地帯をさす名称」⁴⁹とされる。この地点は、「定盤絵図」の「野」に対応する部分であろう。河原は北側に張り出すように描かれるが、これも「定盤絵図」と同様に大メ切により河川を締め切っている影響で堆積がみられるものであろう。大江堰の余水吐である「水こぼし」は、大メ切の東側に描かれているが、この点は「定盤絵図」と異なる点であり、両図を検討する上で留意する点といえよう。

同図南側の大江堰の水路には「定盤石」「水門」「揚堰」が描かれている。「定盤絵図」と「絵図 A」では、磐井川に向けて大江堰の余水吐が設置されていることから、大江堰の水路標高が磐井川よりも高いとよめる。したがって、「揚堰」は大江堰水路の標高を維



「定盤絵図」

「絵図 A」

図6 「定盤絵図」「絵図 A」の東西間数

注) 図中の () の数字、および破線の矢印は、絵図上には直接間数の記載がされていないことを意味する。

持したまま隧道へ導くものであろう。「定盤石」は先に説明したように、河原の先端に設置されたものであり、「入口巾式間 定番石」は、「定番石」によってこの水路幅が2間に定められたということであろう。

「絵図 A」にも東西の間数が書かれている。図の右下の記載から、「定番石」から「水門入口」すなわち、東側の水門図像までの距離が102間程（図6のz'。以下、アルファベットの小文字は全て図6による）、「定番石」から「水門」までが26間であり（y'）とわかる。「川除ヶ」が5～6間であることから（x'）、「土手」は約70間となる（w'）。「石出シ」と「川除ヶ」の幅の違いは明瞭であるが、東西の長さはいずれも同じように描かれている。「定盤絵図」と同様、プロポーシオンがあまり意識されていないようである。「定盤絵図」の分析で、「同度ニテ元定盤マテ八拾間」が、「水門」からの距離であるのか、「水ゴボシ」からの距離であるのかを保留としていた。しかし、「水門より水ゴボシ迄戊ニ當り七拾間」（w）が、「絵図 A」の土手約70間（w'）に対応することから、「同度ニテ元定盤マテ」を「水ゴボシ」から「元定盤」とすれば、この間の距離が10間（x）となり、「絵図 A」の「川除ヶ」5～6間（x'）に近似する値となる。したがって、「同度ニテ元定盤マテ八拾間」は、「水ゴボシ」からの距離と理解したい。

次に「絵図 B」であるが、同図も「絵図 A」に同じく墨のみで描かれている。絵図の内容は、「定盤絵図」や、「絵図 A」に比べて簡素に見えるが、これら2枚の絵図に共通して、大メ切とその西側の照井堰取水口や、北岸の「穴」、磐井川の南への湾曲が描かれており、同一地点を描いていることがわかる。しかし「絵図 B」には、先の2枚の絵図には描かれていた河原の北側への張り出しや、水門等の大江堰側の構造物、東西間数の記載はみられない。また、北岸には山の図像とともに「此処山」と文字記載される。

ただし、同図では河原の堆積がみられずフラットに描かれており、一見堆積前の状況を描いたように見えるが、しかし、大江堰の分水が、「穴」の西側に位置していることから、新定盤設置に関わる絵図であり、ひとまずは、「定盤絵図」および「絵図 A」と同時期とみて差し支えないと考える。

先の 2 枚の絵図にはなく、同図に特徴的なのは、磐井川の中に南北の間数が書かれていることである。この地点には河原の先端から河川に突き出すように石積み⁵⁰が描かれており「絵図 A」に描かれていた「石出シ」にあたるものであろう。この「石出シ」の先端に定盤石があったといえよう。南岸から石積みまでの距離が「七間」であることから、石積みの北側に書かれた「此廣サ見通シ十間程ニ・・・」は、石積みから北岸までの距離であろう。この地点での分水割合は、照井堰側が10間、大江堰側が7間であると、両堰の分水割合はおおよそ6：4となる。「七間」と書かれた文字のやや西側から、河川の曲線が北側にカーブするように描かれているが、これは照井堰側にも水が入るということを示そうとしたのではないだろうか。

さらに、「絵図 A」で、磐井川の北岸に「五串村」、南岸に「猪岡村」と書かれていたものが、「絵図 B」では、それぞれ「御蔵入ノ方」、「猪岡ノ方」と書かれている。「五串村」を含む照井堰側と、南岸の大江堰側の「猪岡村」はいずれも仙台藩領となり、これらを「御蔵入ノ方」「猪岡ノ方」と記載していることから、「絵図 B」は一関藩側で作成された可能性が高い。河川に書かれた川幅の間数が、全て照井堰側から読める方向になっているのも、仙台藩を意識しているように見える。さらに、「絵図 A」と「絵図 B」では、料紙の大きさが異なり、「絵図 B」は「絵図 A」の半分程度の大きさである点も、作成主体の問題が反映されている可能性を指摘しておきたい。

4、絵図の位置付けと大江堰の改修

「定盤絵図」と「猪岡用水一件」絵図の内容を踏まえて、まず「定盤絵図」と「猪岡用水一件」の先後関係および絵図の位置付けについて検討したい。

「定盤絵図」と「猪岡用水一件」絵図についてであるが、「定盤絵図」が「元定盤」と「新定盤」を描いているのに対し、「絵図 A」では、「元定盤」があったとされる古穴の対岸には「水門」が描かれており、「新定盤」の位置に「入口幅式間 定番石」と書かれ、定盤が「新定盤」に移動された後の様子が描かれている。したがって、絵図のみで比べるならば、「定盤絵図」の後に「絵図 A」が作成されたことになり、「絵図 A」は安政元年10月以降となる。しかし、「猪岡用水一件」史料は、先述のように、嘉永6年の大旱魃の際に

起きた争論について書かれている。同史料と「絵図 A」とでは、時期差が生じる。この点について整合的に考えると、次のような展開が想定される。嘉永6年に起きた「猪岡用水一件」争論は、ただちに解決がつかず、安永元年の「定盤絵図」に描かれた定盤の移動によって解決が図られた。つまり、市史でも指摘されていたが⁵¹、照井堰の主張する「土俵堅め」と、大江堰の主張する「瀬下掘方」では解決せず、定盤石の移動をもって取水口および取水割合について解決が図られたのではないか。そして、最終的にこの移動にともなう普請の詳細を記した「絵図 A」が作成された。「絵図 B」は、この過程で、大江堰側が取水割合について主張ないしは検討のために作成した絵図と位置付けたい。

次に取水口の改修について「絵図 A」からは、大江堰の取水口が「石出シ」によって堅められており、大江堰の主張するように、照井堰側で容易に取水口を調整できない形となったことがわかる。ただし、取水割合の問題については、「絵図 A」で示されている水路幅2間が、大江堰の主張する7:3であるのか、照井堰が主張する8:2であるのか、いずれであるのかはわからない。「猪岡用水一件」史料では、溜高を指していると思われる「堰掛水溜貫高」によって割合を算出すれば当、不当が明確であると書かれている。実際に「安永風土記」に記載された照井堰と大江堰の合計溜高と思われるものを参照すると⁵²、南照井堰13ヶ村、北照井堰5ヶ村の合計貫高が999貫308文、大江堰4ヶ村の合計貫高が238貫852文となり、両者の割合はおおよそ8:2となる。この点については照井堰の主張が正しいようにもみえる。そして、これらの問題を左右するともいえる定盤については、「定盤絵図」の紹介では「水量調節盤」と説明される⁵³。照井堰用水では、山目地内で用水を3方向に分水する地点にも定盤石があり、これについて「定盤石を設け各村関係地の溜高により間数を定め水勢を酌量し溝を上中下に三分し」⁵⁴や、「下流の水田面積に応じて上、中、下と水流を分けている定盤石」⁵⁵の説明がされている。幅を決めることで水量に影響するということで「水量調節盤」とされるのかもしれないが、本質的には、分水のための施設であり「水流を分ける」というのが適切な表現であろう。「絵図 A」からも、分水地点という表現が適切に思われ、このしくみで照井堰や大江堰が主張する8:2や7:3の割合に水量を分けたとは考えにくい。ここでは水量の問題というよりも、定盤石によって分水し、水路幅を決めることで両堰の取水について調整を行ったとみえる。

ただし、以上述べてきた定盤石の移動や、これにともなう大江堰取水口の改修が、実際に行われたのか否かについては、今回取り上げている史料からだけでは明らかでない。この点については近代以降の同地点の改修記録等もあわせてみていく必要がある。また、この段階で定盤石の移動まで想定されていなかったということなのか、「猪岡用水一件」史料に、定盤について全く言及されていない点には疑問が残ることも指摘しておきたい。

5、大メ切化とその影響—むすびに代えて—

本稿では、照井堰、大江堰の実態について検討するため、数少ない史料のなかから、「定盤絵図」と、「猪岡用水一件」絵図を取り上げ、絵図の位置付けと、大江堰取水口の改修とその背景について論じてきた。このような取水口をめぐる争論がおきた背景には、伝承では寛永20年とされている大メ切化に原因があると考えられる。つまり、大メ切は、本稿で取り上げた絵図からもわかるように、磐井川を完全に堰き止める形で作られている。この結果、大メ切よりも下流一帯の灌漑を、全てこの地点での取水によって賄う必要がでてきた。両堰にとっては水量増強という恩恵を得ることになったといえるが、一方で、大メ切化により両堰は一体のものとなり、両堰を分水する定盤を設ける必要も生じた。さらに、「定盤絵図」や「絵図 A」で河原の堆積の様子が描かれていたように、河川を締め切ったことで堆積の影響も受けることとなった。堆積により、定盤が不明確になる等の問題も起きたであろう。今回述べてきた大江堰取水口改修の背景にはこのような問題があったことを指摘しておきたい。

最後に、残された課題として次の2点について述べておきたい。

1点目は、大江堰の水口に問題が生じているのは、大メ切設置による堆積にその原因があるとした。大メ切設置時期については、ひとまず伝承に依拠せざるを得ないが、仮に寛永20年とするならば、今回の争論が起きるまでに、200年近く経過しているが、この間に同様の問題が起きなかったのかという疑問が残る。大メ切化を理由に堆積を説明するのであれば、このような問題がコンスタントに発生していたと考えるのが妥当ではないか。史料1や「猪岡用水一件」史料には、これまでに定盤の移動を行ったことや、堆積の問題が頻発しているような書き方はされておらず、今回初めて定盤を移動するという事態になったように読める。史料が残されていない可能性は高いが、史料の残存如何を別にしてもう一つ考えられる問題として、磐井川の水源である栗駒山の噴火による土砂の流出と堆積があげられる。栗駒山は天明3年(1783)に小爆発が起こったといわれているが⁵⁶、このような問題が関係なかったか、可能性の一つとしてあげておきたい。

2点目は、「猪岡用水一件」絵図についてである。先述したように、同図は本来3点存在していたはずであるが、現在確認できない1点について、これが「定盤絵図」の原本である可能性も考えられないだろうか。「定盤絵図」は写しである上に、折り本に装丁されているため、これをもとに料紙の大きさを考察するのは適当でない。しかし、これを実際の大きさと仮定するならば、「絵図 A」と近似する大きさとなる。

限られた史料からは、上記の課題にただちに答えることはできないが、最後に課題とし

て指摘しておきたい。

註

- 1 照井堰や大江堰に関する伝承を記した文献は多数存在するが、この一文は大野清太郎編『岩手叢書』第2巻（大野清太郎、1902-1903年）を参照した。
- 2 阿部和夫氏は、照井堰の開削年や開削者については諸説存在することや、関連する先行研究を紹介されているが、根拠となる史料が明らかでないことを問題点として指摘されている（阿部和夫「北上川流域用水開発に携わった人々―盛岡・仙台藩の用水開発の功労者たち―」『平成25年度 研究紀要』第43集（岩手県南史談会）、2014年）。
- 3 稲松朋子「旧伊達宗勝一関藩領村落における寛文一三年検地帳の分析―西磐井郡下黒沢村の事例を中心に―」『国史学』第222号、2017年。
- 4 稲松朋子「17世紀後半における用水隧道の建設とその背景―仙台藩領における真打堰の事例を中心に―」『國學院大學大學院紀要―文学研究科―』第53輯、2022年。
- 5 稲松朋子「磐井川流域における開発の進展と用水路景観」（例会報告要旨）『国史学』第216号、2015年。
- 6 東北地方建設局岩手工事事務所編『北上川』第4輯（岩手工事事務所、1975年）。
- 7 東北地方建設局岩手工事事務所編『北上川』第1輯（岩手工事事務所、1973年）、247頁。
- 8 本章の照井堰、大江堰の灌漑域については、『伝え流るゝ清流 幾星霜』（照井土地改良区、2012年）による。
- 9 宮城県著、宮城県史編纂委員会編『宮城県史』2（近世史）（宮城県史刊行会、1966年）。
- 10 一関市史編纂委員会編『一関市史』第1巻通史（一関市、1978年）。
- 11 蝦名裕一「仙台藩における内分大名の成立―一関藩と岩沼藩を事例に」『東北アジア研究』15号、2011年。蝦名氏は、伊達宗勝一関藩の成立時期について、寛文元年（1661）が妥当とする説を述べている。
- 12 「肯山公治家記録」（平重道責任編集『仙台藩史料大成』伊達治家記録6、宝文堂、1975年）寛文11年（1671）5月28日および同年6月2日の記録による。
- 13 猪岡村が仙台藩領になっている理由について、同村が秋田藩に隣接するためではないかとの指摘がある（前掲註11）。
- 14 前掲註10。
- 15 前掲註11。
- 16 照井堰の伝承を記した文献は複数存在するが、本章では『岩手叢書』（前掲註1）および、照井堰土地改良区編『岩手県南 照井堰小誌』1958年（『照井土地改良区小誌 鐵心郷潤』照井土地改良区、2006年、

所収)を参照した。

17 『岩手叢書』(前掲註1)では、現在の照井堰を北照井堰、大江堰を南照井堰と呼称している。

18 前掲註10。

19 ①一関市史編纂委員会編『一関市史』第7巻資料編(Ⅱ)(一関市、1977年)。②宮城県著、宮城県史編纂委員会編『宮城県史』27資料編5(宮城県史刊行会、1959年)。

20 仙台市史編さん委員会編『仙台市史』通史編3近世1(仙台市、2001年)245頁。

21 平重道解題『復刻版 仙台叢書』封内風土記第3巻(宝文堂、1975年)。

22 前掲註19①。

23 宝暦13年(1763)の史料に、照井太郎開削説がみえるといい、照井氏の開削伝承は近世から存在していた可能性がある(前掲註2。小野寺啓『磐井考』2003年)。

24 伊藤玄三監修『絵で見る古里 一関郷村絵図』(岩手日日新聞社、2003年)。

25 一関市史編纂委員会編『一関市史』第2巻各説Ⅰ(一関市、1978年)。前掲註8、16(『照井土地改良区小誌 鐵心郷潤』)。

26 高倉淳「磐井川水系 照井堰・大江堰」『仙台郷土研究』復刊第26巻第1号(通巻262号)、2001年。

27 岩手県『岩手県史』第4巻近世篇1(杜陵印刷、1963年)。

28 前掲註10。

29 鈴木幸彦「一関藩田村氏の基礎的考察(その1)―支藩としての従属化の過程を中心に―」『岩手県立博物館研究報告』第3号、1985年。

30 下黒沢村西方は、「安永風土記」(前掲註19①)では下黒沢村に含まれる。

31 猪岡村については「猪岡村宮田下通り」と書かれているが、「宮田」は猪岡村の東部に位置する字名である。猪岡村内では、「宮田」以東の字を大江堰が灌漑するために、このように書かれているのであろう。

32 「安永風土記」三関村の「かつは堰」の項目に「先年当郡猪岡村にて岩井川揚水仕、当村用水堰に御座候処、近年何時となく地高にも相成候哉、水乗合兼候て、相用不申候間、溜高書上不仕候事」(前掲註19①、129頁)とある。猪岡村より取水して三関村を灌漑する用水とあることから「かつは堰」は大江堰のことといえる。

33 田村家文書 No.871「猪岡用水一件」、一関市博物館蔵。市史(前掲註25)では史料番号が「政治(138)308」と記されているが、一関市博物館学芸員の方のお話によれば、これは、『一関市立図書館資料目録』(一関市立図書館、1985年)の田村家文書 No.871「猪岡用水一件」に該当するとのことである。そのため、本稿では田村家文書 No.871「猪岡用水一件」と記す。

34 市史(前掲註25)で、「猪岡揚堰改修意見書(水引方一件)」と紹介されているが、本文で後述するように、田村家文書 No.871の封筒および、この史料がおさめられていたらしき「一関市立図書館」と

印字された封筒の表には「猪岡用水一件」と書かれていることから、本稿では「猪岡用水一件」とよぶ。

35 一関市博物館学芸員の方のお話による。

36 前掲註35。

37 「政308」と「138」の番号は、註33で述べた、市史に掲載されている史料番号「政治（138）308」に関係するものであろう。

38 前掲註25、683-685頁。

39 前掲註25。ただし、筆者が閲覧した「定盤絵図」の史料（史料1）では、普請方は「小林源五郎」と解説した。

40 前掲註26。

41 一関市史編纂委員会編『一関市史』第3巻各説Ⅱ（一関市、1977年）。

42 中村八郎兵衛は前掲註41。遠藤小三郎は、栗駒町誌編纂委員会編『栗駒町誌』（宮城県栗原郡栗駒町役場、1963年）による。

43 前掲註25。

44 「潜穴」は、隧道水路を意味する（高倉淳『仙台領の潜り穴』今野印刷、2002年）。なお、元禄12年（1699）「猪岡村絵図」（前掲註24）、元禄12年（明治21年（1888）写）「磐井郡西岩井絵図（写）」（前掲註24）では、大江堰の取り入れ口付近は開渠に描かれており、当初は隧道ではなかった可能性があるが、この点については今後の課題としたい。

45 前掲註26、59頁。

46 紙背の文字が絵図と同時か後筆かは定かでないが、「4通」の文字はアラビア数字を用いていることから、近代以降の加筆である。

47 「地方凡例録」では、「是は石川の荒川に仕立る水芻にして、小石にては保たず大石を以て仕立るなり（後略）」（大石慎三郎校訂『地方凡例録』下巻（東京堂出版、1995年）207頁）と、説明される。

48 佐藤孝之、天野清文『新版 古文書用語辞典』（新人物往来社、2012年）。

49 前掲註10、805頁。

50 この石積みの図像は、「絵図B」の大メ切に描かれた石積みとは描き方が異なり、石を表現する丸の中に縦筋を描いているように見え、大メ切との工法の違いを示しているものと思われる。「地方凡例録」によれば、水の勢いが強い場所では、石出しを蛇籠で包む場合もあるとのことから（前掲註47）、これを表現している可能性もある。

51 前掲註25。

52 前掲註19①。南北照井堰は五串村の項目を、大江堰（史料中では「猪岡堰」）は下黒沢村の項目をそれぞれ参照した。

53 前掲註24、113頁。前掲註26、59頁。

54 前掲註1、221頁。

55 阿部正瑩『巖美地方の民俗資料』（阿部正瑩、1985年）、274頁。

56 一関市史編纂委員会編『一関市史』第5巻自然編（一関市、1975年）。

付記

本稿執筆にあたり、一関市博物館、照井土地改良区の皆様にお世話になりました。心より御礼申し上げます。

補註

本稿脱稿後に、「猪岡用水一件」史料の宛所の「忠兵衛」は、一関藩士の境沢忠兵衛である可能性が考えられた（「大旱雑録」（註41）。難波信雄、駒板高明「境澤文書目録（上）」『東北学院大学 東北文化研究所紀要』第11号、1980年）。また、差出の「野村八郎右衛門」についても、一関藩士に同名の者が確認できる（大島晃一「幕末期における陸奥国一関藩の家中と城下」『一関藩の研究 北奥近世資料の研究』（大島晃一、2012年）初出は2003年）。「猪岡用水一件」史料は原本が確認できないため、両者については可能性を指摘するに留めたい。

